

医療観光研究会(第3回)議事録【概要】

(日 時)平成30年10月16日(火) 19:00~20:30

(場 所)県民文化会館 5階 大会議室

(出席者)岡村座長、上野氏、坂口氏、寺下氏、吉田氏(JTB)、吉田氏、野尻氏、山西氏

(内 容)

■ 議事

議題1 「和歌山県における医療観光研究の方向について」 資料1、2

事務局より資料1、2の説明

- ・医療観光については、当研究会で議論するとし、地域医療対策協議会の中で地域医療に影響を及ぼさない範囲を検討していく。
- ・地域医療対策協議会では、将来的に必要となる医師数や医療観光となると自由診療となると思うが、地域医療に支障をきたさない方法等を議論したい。
- ・自由診療を抑えるという話と、本来一義的に進めなければならない医療とのバランスをとりながら自由診療を考えるのは異なる。あくまでも地域医療が大前提。将来、医療需要が減ったときに自由診療を検討する余地があるのではないか。
- ・病院協会加入の病院に医療観光についてアンケートを行った。結果、現状の医療を守ることが精一杯で、医療観光へ参入していく意向のある病院が少ない。将来、人口が減少することを踏まえ、医者の数を増やしていくなかで医療の需給バランスが崩れていくということはある。
- ・現状下で自由診療はなじみにくい。医療＝事業というニュアンスが出てきた場合、医療者は保守的なので、将来的にどんどんやっっていこうというのにはならない。それをやっっていけるのは私立で、公的な病院はほとんどない。
- ・将来を考えたとき、地域医療枠で医師となった人たちが熱意をもちながら技術を高めていける機会の創出が必要。地域医療対策は当然の話。医療観光と一緒に議論するというのはフォーラムが違う。このままでは和歌山県の医療は衰退していく。地域医療は最大限守るべきこと。この研究会は、どれだけチャンスを活かすかを議論する場。一般論ではなく、医療観光の具体的な取組を是として前向きに話をしたい。
- ・公的、公立の役割は将来にわたってずっとある。地域医療対策協議会はその役割を果たすため、医師のバランスを考え、議論をする場。観光とは別の話で、医師の需給バランスが重要。医療観光は私的病院が進めていきやすい。公的はやりにくい、社会医療法人もしかり。
- ・国連で、国民皆保険制度について、医師会会長が演説を行った。世界が認める制度で、これを守ることが重要。これに悪影響を及ぼさないか。
- ・海外の方を枠の中で対応するとすると、同じドクターが同時に(地域医療の患者も医療観光の患者も)診療することになりストレスがかかるのでは。どちらかでないと難しい。
- ・観光の立場としては今の時期に取り組んでいく必要がある。ただし、医療関係者がやっっていくとならないと進めていけない。

議題2-1 「わかやま医療観光モデル(案)について」 資料3

事務局より資料3(メディカルツーリズム)の説明

- ・モデル案を実施するとなると、医療コーディネーターと旅行エージェントが必須で、ある程度(海外との)パイプを持った人をどれだけ呼んでこられるか。海外には富裕層がたくさんおり、通常一泊20万円くらいでセキュリティが整った施設を利用している。病院にもそれなりの設備が必要。また、エージェントとのきちんとした契約が必要。
- ・現在、医療観光の検診は東京に偏っている。和歌山の強みは、ある程度先進的な医療があることと、自然や温泉があること。和歌山に活気を持たせるため、若い医師が熱意をもって技術を高めることができるよう、病院の受け入れ患者の5%だけでも医療観光をやると効果がある。和歌山でいろんな病院、診療科が組んでやれば、十分可能性がある。
- ・医療の技術を高めることが必要。技術を高めるためにも、医療観光が活性化へつなげる、呼び水になれば良い。
- ・将来的には、公立、公的病院でも現状の地域医療の医師数で十分にやっていける。特殊な診断などは余力でやればいいのでは。
- ・医療機関の方がオペレーションできれば、宿泊施設はあまり難しい問題ではない。旅行商品としても難しくはない。
- ・(事務局の説明にあったモデルのように)温泉、病院リハビリまでアレンジしているものは、日本では聞いたことがないので非常に面白い。魅力的な内容。
- ・医療観光に対する考え方は色々あると思うが、実際県内の病院から医療観光について意見を求められたり、どういったことをやっているか問い合わせを受ける。
- ・国際マーケットの話として、このモデルが実現すれば日本では初になる。海外では術式のマーケットモデルに取り組んでいる国は多いが、温泉がないので、このモデル自体ができない。国際的にも非常に珍しい。そういう意味で国際競争力があると思う。また、宿泊施設もより高価なものがあればよいが、治療という面では効果・効能が一番重要で、それがあれば施設はそこまでのものでなくてもニーズはある。
- ・将来を見据えれば、誰かがやらないといけないと思う。ただ、外国から診療を受けに来られた人が満足して帰れるのか、彼らのニーズに十分こたえられるのか。中途半端が一番だめ。アンケートで手を挙げているのは2、3か所だが、体制が整っていない。現実にやっているのは白浜のみで、それも細々と土日祝日にやっている。これでは事業として成立しにくい。
- ・他の地域でも医療観光をやりたいけれど、出来ない原因は、医療機関だけでなく医療コーディネーターが不足しているため。地域の医療機関のナースの方たちの負担にならないか、成功のカギは医療コーディネーターの力量によるところが大きい。これを病院外部の人に依頼するか、県で育てるか。

議題2-2 「わかやま医療観光モデル(案)について」 資料3

事務局より資料3(ウェルネスツーリズム)の説明

- ・ウェルネスの規模が大きく、アジアでも需要が膨らんでいる。ただし、先ほどのメディカルツーリズムとウェルネスツーリズムでは医療コーディネーターの関わりが少し違う。メ

- ディカルは診療データなど、医療の能力が必要。その点、ウェルネスは健康な方を診る分ハードルが低い。
- ・健診もやって効果検証までしているものはない。
 - ・過去に熊野古道健康トレッキングでストレスデータを取るなどし、それを売りにたくさんの方に来てもらった。食の面では、本宮には有機栽培で育てたものを使った料理を出しているところもあり、旅館でも低カロリーのを提供している。医療機関はないが、健康を求めて熊野古道に来られる女性たちがいる。外国人に対しては、現在スピリチュアルを軸にしているが健康を組み合わせる形で売り出せると思う。
 - ・訪日外国人のどのレベルの方を対象とするのか、数・ニーズはあるのか。健康診断にも高いレベルを求めている。ちょっとした相談にのってくれる程度のものを求めているのか。
 - ・豪華なホテル、医療施設を想定している外国人が一部いる。それを和歌山県で提供する、病院が片手間で取り組むのは難しい。施設にしる、診療にしる、どれくらいのレベルを求めているかわからない。
 - ・どこまでのニーズがあるのかというマーケティングまでできていないが、中国は健康志向のニーズが高いのは間違いない。それに健康診断、健康熊野ウォークを組み合わせ、どういう反応を示すかは不明。欧米人は、熊野古道にスピリチュアルを求めているので健康志向とは違う。
 - ・ニーズは不明だが、大事なのはパイプ。中国、東南アジアなど固いパイプがあればできる。観光に医療を入れ、活性化しようというのが視点。パイプがあればそれ以上のことができる。
 - ・ターゲット国、患者層はどうするのか。例えば、中国では日本の都心部の検診ニーズは非常に高いので、なぜ和歌山かを示すことができれば流れは作れる。そのきっかけが信頼できるファシリテーターとなる。
 - ・東ヨーロッパに多く、ドイツでは温泉治療も保険の対象となっている。健康にとって効果があるか、プラスになっているかがポイント。
 - ・新しいことをやる時には規制がある。議論していてもまとまらない。和歌山の医療機関で今できる技術、収容力で一度やってみてはどうか。
 - ・モデルを作ってやるのは、中途半端が一番ダメ。きちんとした検証が必要。
 - ・大事なのは仕組み。コーディネーターもいれて、弁護士との契約など、組織の仕組み作りをきっちりすることが重要。
 - ・病院がやっていただけなのであれば医療観光はできる。ファムツアーなどをして、評価を頂くのは可能。今まで「医療」で観光客へプロモーションやったことは一切ないが、チャンネルも整っているなので、十分響く。
 - ・実際に受け入れている医療機関に、日本人の患者とのバランスをとりながらどう取り組んでいるのか情報を聞く機会があったらいい。ある程度の情報を仕入れてから、プランニングする。